

# 二〇一九年度・学力検査問題【国語】

(高校第一回)

## 注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は13ページで~~一~~・~~二~~・~~三~~の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていなき場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてあります。設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。  
また、特に指示のないかぎり、句読点等も一字に数えます。

次の文章は「幼児教育・児童教育における絵本とはどうあるべきか」について書かれた文章の一部です。読んで後の問い合わせに答えなさい。

「人間は言葉でものを考える」といわれています。言葉がなかつたら、頭の中で、記憶し、整理し、順序だてて考えを進めていくことができません。また、言葉の影ともいえる文字によって、その考え方や記憶をたくわえたり、たがいに交換したりして、より広く、大きく考えを開しているのはいうまでもないことです。

しかし、私は、「人間は絵（イメージ）でものを考える」ということもできる、と考えています。例えば、地図や、文字盤のある時計や、<sup>きかがく</sup>幾何学などは、絵で考える、という範疇に属します。

虫という言葉を知らない子どもが、はじめて虫を見たとき何を考えるでしょうか。その子は、直接その得体の知れないものと対決する他ありません。もしその子が積極的であれば、その虫に対して、彼にしか通用しない名前（言葉）を与えるでしょう。そして、その名前を与えるまでの新鮮で大切な体験は、言葉という抽象されたものに置きかえられます。

その言葉が共通語としての虫、あるいはコオロギであることを、やがて、人は教え、彼は学びます。大人は、彼がコオロギを見てコオロギだ、といったとき「理解している」と判断します。<sup>1</sup>おろろしいことに、やがて彼自身も、コオロギという名前を覚えたとき、その虫を理解した、と思いはじめます。

彼が知ったのは、コオロギそのものではなく、たんにコオロギという言葉です。新鮮で感動的でさえあつたあの得体の知れないものとの

直接的関りあいを忘れたのでは、何にもならないのです。  
言葉で考えることが直線的、論理的であるのに対しても、絵（イメー

ジ）で考えることは、平面的、直観的です。

絵（イメージ）でものを考える方が、言葉で考えることに勝るなどといつているのではありませんが、今世紀はじめの、ある哲学者たちの迷いを、ここで思い出さぬわけにはいきません。

哲学者は、言葉の世界に住んでいます。その言葉によつていろいろな命題を解いてきました。善とは何か、嘘とは何か、そして言葉とは何か、……と。しかし、彼等は言葉というものを定義づけようとしたときに、やはり言葉を用いるほかない、というジレンマにおち入つたのです。

もちろん、このパラドックスはせんごく解決されているそうですし、もしそうでなかつたら、哲学という学問そのものがとつくなくなつてゐるでしょう。ただいえるのは、言葉というものが、実にあいまいなものであることを、哲学者が認めざるを得なかつたということです。

私はいま、ヘレン・ケラーのことを思い出します。

A 彼女は、目も見えず、耳も聞こえず、話すこともできませんでした。彼女の家庭教師であったサリバン先生は、不幸な彼女を教育するためには想像もつかない苦労をします。

B あれは、『奇蹟の人』というヘレン・ケラーの伝記映画でした。サリバン先生は水をさわらせて、手のひらにwaterとかきます。井戸のポンプから出る水をさわらせて、またwaterとかきます。私たちにとってそれは文字であつても、彼女にとっては、変なおまじないののようなものとしか思えなかつたでしょう。そもそも、彼女

は文字とか、言葉というものがあることを知らないのですから……。

**D** サリバン先生は、あとを追っかけて、二人とも川の中でころんでもしまいます。そしてずぶぬれになった彼女の手のひらに、また、water とかくのです。**E**

彼女は、コップの中の、あの得体の知れないものも、井戸のポンプから出てくるものも、いま体中を濡らしてしまったそれも、みんな water というものであつたかと、この時はじめて雷に打たれたよう気がつくのです。

そして、ものには名前があること、名前は文字というもので表わされていることをはじめて知るのです。彼女はきょうきします。昨日まで呪文でしかなかつたearth という文字を、はじめて大地にかき記すのです。彼女の両の目からは涙が流れで止まらないのです。<sup>4</sup> それは彼女の目が開いたのも同じことでした。そして、この時から彼女は、言葉という道を通つて、光のある世界へ出ていったのです。

彼女の両親はもちろんサリバン先生にとつても、私たちにとつても、忘れる事のできない事件でした。それは、人間にとつて言葉が誕生する、あまりにも劇的な場面だからです。

このことから、言葉のもつ大切な意味について理解するだけでなく、言葉や文字が意味をなさなかつた時代の彼女の感覚に注目してほしいのです。<sup>5</sup> それは、先に述べたコオロギという言葉を知らない子どもがコオロギを見た場合の様子に少しだけ似ています。

言葉で考えることが、間接的、知性的であるのに対し、絵で感じるのは、直接的、感覚的だと考えることができます。

の力を借りるか、そもそも絵や図を描くしかないでしょう。つまり、「考える」ためには、「絵（イメージ）で考える」場合でも、それを言葉に置きかえなければならないのです。私はここで前言を多少ていせいしなければなりません。

X

例えば、自分が今、悲しんでいるという事情を理路整然と説明されたのでは、その理由は説明できたとしても、悲しいという感情を人に伝えることはできないでしよう。

まして、自然や、芸術品からうける「美しい！」というような複雑な感情を表わす言葉は、自分の知つてゐる言葉の中からは見当らないかもしれません。それでも無理に探していい表わそうとする言葉は、それを「詩」とまではいわないまでも、詩の原型だといつてもいいのではないでしようか。

大人は、無理に言葉を探しますが、子どもは、容易に言葉を拾い出します。ほとんど短絡といつてもいいほどの子どもの言葉が、時として「詩」のように思えてくるのです。

このような言葉以前の直接的、感情的な世界は、第三者がほとんど入りこむことのできない世界です。芸術教育（詩を含めて）はこの世界にタッチしようと試みるのですが、まだ信頼すべき方法が<sup>6</sup> かくりつされたとはいえない状態です。

幼児は、まだ「ことばで考える」より、「絵で考える」、もしくは「絵で感じる」世界に住んでいます。つまり、第三者が、その世界に入りこんで、その感覚、あるいは感情を望ましい方向に育て得る

可能性が残されているといえそうです。

幼児教育や、初等教育が重要な意味をもつのは、まさに、この故に<sup>6</sup>です。だから絵本は、この時期に最も大きい働きをするだろうと思うのです。

絵本は「おもしろくてためになる」とか、「知識が豊かになる」といつた、単純なもののためにではなく、彼の無意識に直接作用するものでなければならないと思うのです。

（安野光雅『空想工房』平凡社より）

※パラドックス：逆説。一般に、常識的な前提から、受け入れがたい結論が出てしまうこと。

問一 線あくのひらがなを漢字に直しなさい。

問二 線1「理解している」・2「判断します」とありますが、その主語として適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア その言葉
- イ 人
- ウ 大人
- エ 彼
- オ コオロギ

問三 線A「ジレンマ」とあります。その意味として最も適切なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

- ア 出発点
- イ 策略
- ウ 解答
- エ 板挟み

問四 次の文は、本文の[A]～[E]のどこに入りますか。最も適当なも

のをえらび、記号で答えなさい。

毎日このようなおまじないごっこにうんざりしたヘレン・ケラーは、突然走り出して方向を失い、とうとう川にはまってしまいます。

問五

――線3「おそろしいことに」とありますが、筆者はなぜ「おそろしい」と述べているのですか。その説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア 子どもがコオロギというものを、コオロギという言葉を知る以前に感覚的に知つてしまふことは、普遍的で一般的な世界を知つて、成長する過程で何らかの障害をもたらすことになつてしまふから。

イ 子どもがコオロギという言葉を覚える前に、その虫に彼にしか通用しない名前や言葉を与えることは、普遍的な世界の把握以前に、独自だが誤った方法で世界を把握することになつてしまふから。

ウ 子どもがコオロギという言葉を覚えなければ、その虫を發見出来なかつたとするなら、直接的・感覚的な関わりによつて、世界を捉える在り方が間違えであることになつてしまふから。

工 子どもがコオロギという言葉を覚えたことで、その虫を理解したと思うことは、初めてその虫に出会ったときに感じた新鮮で感動的な直接的関わり合いを忘れてしまうことになるから。

問六 線4 「それ」とあります、それが指している内容を簡潔に説明しなさい。

問七 線5 「それは、～似ています」とありますが、どのよう

うな点が「似ている」のですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 言葉によって、それまで直観的に見ていた世界の輪郭がはつきりさせられた点。

イ 世界を、言葉や文字によってではなく、地図や文字盤などのイメージによってとらえている点。

ウ 言葉や文字が意味を持たない状態で、感覚のみで直接、得

体の知れない世界をとらえている点。

工 直観やイメージによってとらえていた世界を、改めて言葉によつて抽象的に理解している点。

問八

X

に入るものとして最も適当なものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

ア 私がここまで「考える」といつてきたのは「感じる」ことと同じだったのです。

イ 私がこれまで「絵（イメージ）で考える」といつてきたのは絵で感じることだったのです。

ウ 私がこれまで「絵（イメージ）で考える」と言つてきたことは、決して言葉では伝わらないのです。

工 私がこれまで「絵」と「言葉」で区別していたことには意味がなかつたのです。

問九 線6 「この故に」とありますが、「この」の指示内容に

注意して、説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 言葉以前の「絵で考える」ような直接的・感覚的な世界は、私的な内面的な世界なので、第三者が決して入り込むことが出来ない世界であるが故に、ということ。

イ 子どもは、直接的・感覚的な世界で得た複雑な感情を表現する際に、いつもたやすく、「詩」に直接つながるような素晴らしい言葉を拾い出せるが故に、ということ。

ウ 幼児教育や初等教育では、「ためになる」本や「知識が豊かになる」本よりも、子どもの無意識に直接作用するような言葉のない絵本が必要であるが故に、ということ。

工 幼児教育や初等教育が「絵で考える」世界に生きている子どもたちを、「言葉で考える」世界に引き入れ、望ましい方向に導くことが出来る、が故に、ということ。

オ 幼児が「言葉で考える」より「絵で感じる」世界に住んでいるために、その世界に入り込んで、その子の感覚や感情を望ましい方向に働きかける可能性があるが故に、ということ。

―― 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

「あたし（＝あおちゃん）」は、図書委員の女子生徒で、教室では陽気で無神経な「陽キヤ」グループから、陰気な感じの「陰キヤ」だと大声で馬鹿にされました。その頃、信頼する司書の「しおり先生」にお気に入りの本を生徒に貸し出すときに見せる笑顔の理由を質問したところ、「だって、自分が好きな本を、好きになつてくれるかもしれないんだよ」と言われたことが今でも心に残っています。二年生になってから、「陽キヤ」グループであるはずの「三崎さん」が一人で図書室に来るようになりました。

それからも、連日のように三崎さんは図書室へやつて來た。

奇妙な話だった。あたしが一年生だった去年の間、三崎さんの姿を図書室で見かけたことは一度もなかつた。それなのに、いつたいどん

な心変わりがあつたのか、お昼休みだけじゃなく、放課後にですら彼女は図書室に姿を現すようになつた。

お昼休み、三崎さんはあたしたちが司書室でお弁当を食べ終えたころにやつてくる。ふらふらと書架の間を歩き、雑誌の類を手に取つて、テーブルでそれを退屈そうに捲りだす。<sup>めく</sup>たいていの場合、それはゆるふわな思考回路を持つてゐる子が好きそうなファッショソノ誌だった。そのページを捲り続けて、授業が始まるとぎりぎりの時間に帰つていく。放課後にも、彼女はまつすぐ図書室にやつてくる。やっぱり同じ雑誌

を捲つて、ときどき図鑑の類を眺めたりして、三十分钟左右<sup>じゅうじゆう</sup>でから帰つていく。勉強をするわけでも、小説を読むわけでもない。いつたひなにをしに来ているのか、本当にわけがわからない。

耳をつんざくような笑い声をあげるわけでもなく、ひとりきりで静かに過ごす三崎さんの姿は、なんだか新鮮で不思議な絵面<sup>えびら</sup>だった。だから、改めて眺めていると気付くこともある。たとえば、三崎さんが黙つたまま、俯き加減に雑誌を眺めているところは物憂<sup>ものう</sup>げで、ツヤツヤとした髪が長いから、黒縁の眼鏡でも掛ければ、文学少女風に見えるかもしれない。<sup>2</sup>ほんのちよつと、しおり先生みたいに見えなくもないと思つた。まあ、読んでる雑誌がファッショソノ誌の時点で文学少女失格なんだけれど。

「あおちゃん」

三崎さんが帰つたあと、受付のカウンターでぼけつと頬杖<sup>ほおづえ</sup>を突いていたら、しおり先生にそう呼びかけられた。

「どうしたの。読書もしないで、珍しいね」

「ちょっと考え事してただけ」

「ふうん？」先生は眼鏡の奥の眼をまたたいて、不思議そつに首を傾げた。それから、手にしていたノートを差し出してくる。「あおちゃん、暇ならこれに答えてあげてくれる？」

先生が差し出したのは、「おすすめおしえてノート」だった。なんの変哲もないよくあるノートに、図書委員の先輩が親しみやすい文字とカラーペンで飾り付けたものだ。普段はカウンターに置いてあって、自分がこういう本を探してて読みないと書くと、しおり先生や図書委員が答えてくれるようになつてゐる。もちろん、図書室の利用者が才

スヌメしたい本のことを書くのもオッケーで、秘やかに文字だけの交流がそこで繰り広げられている。先生は最後のページを開いていた。あたしはそれを受け取って、書かれている内容に眼を通す。少し硬質な印象を受ける丁寧な文字で、こう書かれていた。

『女の子が主人公のお話を読みたいです。でも、恋愛、部活、友情、そういうのは苦手です』

「あおちゃん、趣味が合いそうじゃない？」

先生の言葉に、あたしは鼻を鳴らす。まあ、確かにそうかもしれない。これは物語の要素を全否定するような、難しいリクエストと言えのかもしれない。しおり先生は、だいたい図書委員の読書傾向を把握していて、あたしがどんな本が好きなのかも知っていた。これは、あたしが答えるのに最適な質問だろう。

3 「いい趣味、してるじやん。  
「思いつくものある？」

「うーん」

普通の子だったら答えられないかもしれない。だつて、だいたい女の子を主人公にした小説って、ほとんどが恋愛ものだし、そうでなければ部活のこととか友情のことが描かれている。そうでない作品なんて、あつたとしても普通の子は読んだりしないだろう。けれど、あたしには何冊か心当たりがあつた。ペン立てからシャーペンを取り出し、ノートを広げてカウンターに向き直る。数冊の候補の中から、どの本を、どんなふうに紹介したら、興味を持つてもらえるだろう？ そんなふうに考え込んでいるところを、<sup>4</sup> しおり先生は候補がまつたく思い付かないのだと勘違いしたのかもしれない。

「先週、あおちゃんが借りていったやつはどう？ 近くなかった？」  
「ああ、あれね……。ううーん、あれは好きじゃなかつた」  
「あ、そなんだ。残念」

しおり先生は頬に手を当てて、首を傾げた。わかりやすく眉尻が下がっている。

「でも、どうして？ あおちゃん、好きな本だと思ったのになあ」「どうしてつて」

そう問われると、首を傾げてしまう。あたしはちょっとと考えて答えた。なんだか、しおり先生があまりにも残念そうな表情だったので、きちんと理由を説明しておかないと悪いと思ったのだ。

「なんていうか……、あたし、結末がはつきりしないお話って苦手なんだと思う」

小さく頷いて、先生はあたしの隣に腰掛けた。眼鏡の奥の優しい眼差しが、言葉の続きを待つように、あたしのことを見た。

「あの本の短編って、どれも最後はぼかして終わってるでしょ。なんか、卑怯だよ。主人公がどういう行動を取ったのか、その結果はどうなつたのか、なんにも書いてない。ハッピーエンドなのかもしれないし、バッドエンドなのかもしれないくて、そういう、丸投げされてる感じが苦手」

手にしたシャーペンを、くるくると回転させながら、読書のときに感じた不満を語る。

すると、先生はくすくすと笑い出した。

「なに」

「ううん。前に似たようなことを言つた子がいたなあつて」先生はそ

う言つて、頷いた。「あおちゃんの言う通り、確かにそうかもしだね」

「先生は、どうしてああいうのが好きなの」

「うーん、そうね。たぶん、それがきっと、本を読むことの魅力の一つ、だからかなあ」

わけがわからない。思わず眉が寄つて、先生を見てしまふ。

「だつて、そこにどんな結末を描くのかは読み手の自由なのよ。物語がどう終わるのか、そのあとどうなつたのか、すべて読み手の価値觀に委ねられていて、わたしたちの心を試しているような感じがするでしょう」

するでしょ、なんて言われても、まったくわからない。

「物語の主人公を幸せにできるかどうかは、わたしたちの心したい。それはつまり、わたしたち自身を幸せにできるかどうかも、わたしたちしだいってこと」

ときどき、先生はこういうわけのわからないことを言う。あたしの、その不審げな気持ちがありありと表情に出てしまつたんだろう。先生は気恥ずかしそうに苦笑いをした。

「ごめんごめん。気にしないで。あくまで、先生の感想だから」

少し席を外すから、お願ひね、と言つて彼女は図書室を出て行つてしまふ。

もう遅い時間なので、図書室に人の姿はほとんどない。ぼつんと放置されてしまつたけれど、『おすすめおしえてノート』にペンを走らせるのなら、一人きりの方が集中できる。見当を付けていた中から、二冊を紹介することを決めて、その物語の魅力について簡潔に書き込

むことにした。

この、ひねくれた趣味を持つた質問者は、どんな子なのだろう。質

問する人間も、回答する人間も、名前を記入するかどうかは自由で、この質問者にはもちろん、名前が書かれていなかつた。

あまりの睡魔に、あくびを噛み殺す。

昨日、読んだ本があまりにも面白かつたので、ついつい夜更かししてしまつた。今日は図書委員の当番ではなかつたから、こうして放課後にカウンターに居座る必要もなかつたのだけれど、なにか面白い本でもないかなあつて本を借りに来たついでに、先生に留守番を任せられてしまつた。さつきまでブツカーがけの作業を手伝つていた図書委員の女子が、カウンターの少し離れたところで読書をしている。書店のカバーが掛かっていたので、私物だ。あの紙の質感は、ラノベに間違いない。どんなのを読んでいるのか、ちょっと気になる。同じ二年生の間宮さんで、あんまり話をしたことがない子だつた。趣味が合うのなら、仲良くなりたいなつて思うけれど、でも違つたら困っちゃうから、話し掛けることができない。

ちらちらと、間宮さんに眼を向けていたせいで、気が付くのが遅れてしまつた。

「あの」

顔を上げると、すぐ目の前に、ここのことろよく観察していた人間が立つてゐる。

三崎さんだつた。

ぎよつとして、心臓が跳ね上がる。なんなの、いつたいなんの用事？

ついに宣戦布告にでもやつて来たの？　あんたたち陽キヤが、陰キヤの聖域を占領しようつて算段なの？

「本を借りたいんだけれど、どうしたらいいの？」

「え、あ、えつと」

混乱気味に、カウンターを振り返る。こういうときに限って、しおり先生の姿はない。間宮さんは読書に夢中で、こっちに気付かないふりでもしているみたいだった。他の一年生も、奥で掲示物を作る作業をして、背中を向けていた。

「それじゃ、その、本と生徒証を——」

彼女が持っている本に眼をやつて、言葉を途切れさせた。思わず<sup>ふざ</sup>笑いでしまう。

「それ」

あたしの言葉に、三崎さんは不思議そうな顔をした。

「借りられない？」

「えと……。そうじゃなくて」

彼女が持っていた本は、あたしがリクエストに応えて、『おすすめおしえてノート』に記した作品の一つだった。地味なタイトル、地味

\*3そとうていな装幀、地味なあらすじと三拍子揃つていて、この本を自分から手に取ろうと思う人間なんて、まずいないだろうと思える本だった。著者

の名前だって『さ行』なのかなと思ったら『た行』を探さないとダメだったりして、とにかく探し出すのは難しい。それなら、三崎さんがこの

本を手にしている理由は、一つしかない。

「あれ、三崎さんだつたの」

「あれ？」

彼女は眉間に皺を寄せて、少し難しい表情をする。

「えつと、その、あれ」

わたしは、カウンターに置かれているノートに指し示した。すると、気が付いたのか彼女は少し驚いたふうに眼を開いて、それから俯いた。

「えつと、うん」

もしかしたら、恥ずかしかったのかもしれない。せっかく匿名で書いたのに、こうしてバレてしまつたら、たぶん気まずくなる。

「あ、ごめん、えつと、これ、勧めたの、あたしで」

「ううなんだ」

彼女は俯いたまま、顔を上げない。会話終了。気まずい沈黙がやつてきて、あたしは必死になつて続ける言葉を探す。結局、黙つたまま貸し出し手続きをした。本の上に彼女の生徒証を乗せて、それを差し出す。

「はい。期限、二週間だから」

三崎さんは黙つたまま頷いた。彼女が本を受け取つて、<sup>7</sup>あたしの指先からその質量が去つていく瞬間、慌てて付け足した。

「よかつたら、感想、聞かせて」

振り絞るみたいにこの喉から出てきた声は、ここが教室だったら、たちまち騒々しさでかき消えてしまうほど弱々しいものだった。

けれど、言葉は奇跡的に届いたみたい。

「うん」

三崎さんは、手にした本を胸に押し当てるようにして頷く。

心なしか、その口元が笑つてているように見えた。

8あたしは、本を受け渡すために立ち上がり<sup>た</sup>った姿勢のまま、図書室を

去つて行く彼女の背中を黙つて見送つていた。緊張のせいか、それとも別の原因があるのか、心臓の鼓動がうるさく音を立てて、耳の奥にまで響いている。どきどき、していた。久しぶりの感覚だった。掌

に汗が湧き出て、胸が苦しくなり、頬が熱くなる。夢中になつて、物語のページを捲<sup>めく</sup>るときのよう。心躍る冒險に、主人公と共に旅立つときみたいな、そういう不思議な感覚がした。

気に入つてくれると嬉しいな、と思つた。

「だつて、自分が好きな本を、好きになつてくれるかも知れないんだよ」

しおり先生の言葉の意味が、ほんの少しだけ理解できた気がした。

(相沢沙呼『その背に指を伸ばして』)

小説すばる二〇一八年七月号より)

### 問二 線2 「ほんのちよつと、～と思つた」とあります

が、この時の「あたし」の気持ちを表したものとして最も適当なもの

を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 三崎さんは大人っぽい趣味の人なのかも知れない。

イ 三崎さんとはもしかしたら趣味が合うのかも知れない。

ウ 三崎さんは本当は私とおしゃべりしたいのかも知れない。

エ 三崎さんにはこの図書室は居心地が悪いのかも知れない。

### 問三 線3 「いい趣味」・6 「ひねくれた趣味」とあります

が、これらの表現の違いから「あたし」のどのような一面がわかりますか。次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分たち読書家は皆友達という仲間意識を持つ一方で、他の者の読書傾向に厳しい目を向けている。

イ 自分の本選びのセンスが絶対で、他の人のセンスを認めないという頑固さを持っている。

ウ 自分は読書がいい趣味だと密かに思いながらも、人前では自信を持って言い出せない気弱さがある。

エ 自分は周囲の子には理解し得ない面があるものの、独自のこだわりを持っているという自負もある。

イ 柔軟で臨機応変に物事を処理してゆくしたたかな印象。

ウ 大した考えもなく周りの雰囲気に流されやすい印象。

エ 場の雰囲気に合わせ気遣いを見せる物腰柔らかな印象。

- 問一 線1 「ゆるふわな思考回路を持つてる子」とあります  
が、この表現から「あたし」は「三崎さん」に対してどのような印象を持つていると考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 粘り強く物事に取り組みおつとりして真面目な印象。

問四 線4 「しおり先生は～勘違いしたのかもしれない」と

あります。が、「あたし」がこのように考えた理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア しおり先生の方から本の候補を提案してきたから。

イ しおり先生があたしの読書傾向とは違うと判断したから。

ウ あたしの読書傾向とは元々違っていたから。

エ どう考へてもあたしには答えられない難問だったから。

イ 苦手だった相手に気まずさを覚えながらも、自分の大事な

本を託すと同時に三崎さんはどう読んでくれるかを知りたい

という気持ちが芽生えた。

ウ 「あたし」を嫌っている三崎さんは話すまいとずっと思つ

ていたが、図書室に本を借りにくるのであれば図書委員としての仕事はしっかりと遂げようと決断した。

エ 自分の思いを伝えることはためらわれたが、三崎さんに対して親しみを感じ始めたと言うチャンスは今しかないと判断して思い切った行動に出た。

問五 線5 「ときどき、先生は～わからない」と言つて

あります。が、この時の「あたし」は「しおり先生」をどのように思つていますか。それについて述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「あたし」の理解を超えた先生の言葉を訝しんでいる。

イ 「あたし」の読書傾向から逸脱した先生の言葉に困惑している。

ウ 「あたし」を困らせる先生の言葉を腹立たしく思つている。

エ 先生が「あたし」に発した子供じみた言葉に動搖している。

問六 線7 「あたしの～付け足した」とあります。が、この時

の「あたし」について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の凝り固まつた物の見方で、いつまでも片意地を張つて言いたいことも言わないでいるのは、本当に馬鹿馬鹿しいと突然気がついた。

問七 —— 線8 「あたしは、——見送っていた」とあります、この時の「あたし」の説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 気の利いた返事が上手く言えなかつたとの反省はあるものの、それでも自分がやるべきことをやり遂げたという満足感に浸つてゐる。

イ 自分にとつては渾身の一言を放つた実感を抱きつつも、人の心は簡単に分かり合えるものでもないので、油断せず今後を見守ろうとしている。

ウ 日頃の自分にはなかなかできなかつた思い切つた言動に自らの変化を感じ取り、その余韻にひたるとともに、今後の展開に期待をし始めている。

エ 自分が嫌いな人に対して自分の好きな本を紹介する初めての体験に緊張するとともに、大変な疲労感を伴うものだと感概に耽つてゐる。

## 二

問題文〈甲〉・〈乙〉を読んで、後の問い合わせに答えなさい。  
なお、問題文〈乙〉については設問の都合上、送り仮名や返り点を省略した部分があります。

父の死により即位した莊王は全く政治を顧みず、日夜宴を催し、諫言する（＝目上の者へ忠告する）者は全て誅殺する（＝罪を責めて殺す）と宣言しました。そんなある日の宴の席で、臣下の一人が闇に乗じて後の袖を引き、怒りを買います。王の計らいで幸いにも誅殺を逃れたその臣下は、後に晋から攻められた際、懸命に戦つて勝利に貢献します。

問題文〈乙〉は、問題文〈甲〉の話の元となつた漢文から、「かたきの國（＝晋）」から攻められるも、勝利を収めた後の莊王と臣下とのやり取りに対応する場面の引用です。

### 〔甲〕

昔、<sup>1</sup>楚の莊王と申す人、群臣を集めてよもすがらあそびたまひけり。  
その御かたはらに浅からず思ひ聞こえさせたまひつる后さぶらひたまふを、人知れず「いかでか」と思ひたてまつれる臣下ありけり。ともしぐ風に消えたりけるひまに、後の御袖を取りて引きたりけるを、限りなくいきどほり深くやおぼしけん、御手をさしやりてこの男の冠の纓を取りて、「かかる事なん侍る。早く火をともして纓なからん人をそれと知らせ給へ」と申したまふを、主、もとより人をあはれみ情け深くおはしければ、「ともし火消えたるほどに、これに侍る人びとおのの纓を取りてたてまつるべし。そののち火はともすべし」とのたまはするに、この男、涙もこぼれてうれしくおぼえけり。かくともし火あきらかなれど、たれもみな纓なかりければ、その人と見

えざりけり。かれどもこの人、「いかにしてか主のなさけをむくいたてまつらん」と心のうちに思へりけるに、主、かたきの国にせめられて、あやふきほどにおはしけるを、この人ひとり身をすてて戦ひければ、主勝たせたまひにけり。この事を思はずにあやしくおぼして、その故を尋ね問はせたまふに、この人申していはく、「昔、後に纓を取られたてまつりて、思ひやるかたなくおぼえし時、たれとなくまぎらはしたまひし事、我今に忘れ侍らず」と泣く泣く申しけり。

### (唐物語)

〔乙〕

晋<sup>\*3</sup>与<sup>レ</sup>楚<sup>フ</sup>戰<sup>リテ</sup>。有<sup>二</sup>一臣<sup>ニ</sup>常<sup>ニ</sup>在<sup>レ</sup>前<sup>ニ</sup>五<sup>タビ</sup>合<sup>シテ</sup>五<sup>タビ</sup>獲<sup>リ</sup>。  
首<sup>ヲ</sup>却<sup>レ</sup>敵<sup>ヲ</sup>卒<sup>ヲ</sup>得<sup>レ</sup>勝<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。莊王怪<sup>ミテ</sup>而<sup>ヒテ</sup>問<sup>ハグ</sup>曰<sup>ハ</sup>、「寡<sup>ムカシテ</sup>人<sup>ノ</sup>德<sup>シ</sup>薄<sup>シ</sup>。又<sup>未<sup>タ</sup></sup>嘗<sup>タ</sup>異<sup>ジ</sup>子<sup>ヲ</sup>。子<sup>ノ</sup>何<sup>ノ</sup>故<sup>ノ</sup>出<sup>レ</sup>死<sup>不<sup>レ</sup></sup>疑<sup>ハ</sup>。如<sup>レ</sup>是<sup>ク</sup>。」對<sup>ハク</sup>曰<sup>ハ</sup>、「臣<sup>ヲ</sup>當<sup>レ</sup>死<sup>レ</sup>。往<sup>以前</sup>者<sup>ニ</sup>醉<sup>ヒテ</sup>失<sup>レ</sup>禮<sup>ヲ</sup>。王<sup>ヲ</sup>隱<sup>シ</sup>忍<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>加<sup>レ</sup>誅<sup>ヘ</sup>也<sup>。</sup>臣<sup>ヲ</sup>終<sup>ニ</sup>不<sup>ル</sup>敢<sup>ヘ</sup>以<sup>テ</sup>隱<sup>蔽</sup>之<sup>ヲ</sup>。而<sup>ヒテ</sup>不<sup>レ</sup>中<sup>ノ</sup>顯<sup>ヘ</sup>報<sup>ヘ</sup>王<sup>ヲ</sup>也<sup>。</sup>常<sup>ニ</sup>願<sup>フ</sup>下<sup>ル</sup>肝<sup>腦</sup>塗<sup>レ</sup>地<sup>ヲ</sup>用<sup>ニ</sup>頸<sup>血</sup>也<sup>。</sup>」  
楚<sup>タル</sup>得<sup>一</sup>以<sup>テ</sup>強<sup>レ</sup>此<sup>ヲ</sup>。有<sup>陰</sup>德<sup>者</sup>必<sup>有</sup>陽<sup>報</sup>也<sup>。</sup>

### (『説苑』復恩)

※ 1 楚の莊王：古代中国の王国、楚の莊王。後出の「主」も同じ。  
※ 2 纓：冠の後ろに尾のようにつける装飾の具。

※ 3 晋：楚と同じく、古代中国の王国名。楚と戰を交え、莊王のもとに大敗した。

※ 4 臣：わたくし。

問一——線 a 「思ひ」・b 「おぼし」・c 「取り」とあります。それぞれの主語の組合せとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- |        |      |      |
|--------|------|------|
| ア a 莊王 | b 后  | c 后  |
| イ a 臣下 | b 莊王 | c 后  |
| ウ a 后  | b 臣下 | c 莊王 |
| エ a 莊王 | b 臣下 | c 臣下 |

問二——線 1 「いかでか」とあります。その内容の説明として最も適當なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

- ア どうして王は宴に興じてばかりいるのだろうか。  
イ なぜかあの臣下の者が気になつて仕方がないことだ。  
ウ なんとかして后の気を引きたいものだ。  
エ なんとしても王に取り入ろうではないか。

問三——線 2 「かかる事」とあります。その内容として最も適當なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 王の政治に異を唱えようとした臣下がいる、ということ。  
イ 后に対する王の態度をたしなめた、ということ。  
ウ 何者かが無礼にも后の袖を引いた、ということ。  
エ 王が怒りに任せて臣下の纓を取った、ということ。

問題四 線3 「その人と見えざりけり」とあります、その解釈

として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 王から宴に招かれる者のように見えなかつた。

イ 后が探し出したい者が誰であるかわからなかつた。

ウ 王を非難する者のように見えなかつた。

エ 后が思いを寄せている者が誰であるかわからなかつた。

問題五 線4 「寡人徳薄（＝わたくしは徳の少ない者だ。）」

とありますが、「このように莊王が臣下に対して謙遜した態度をとるのを、問題文〈甲〉の語り手はなぜだと捉えていますか。その理由の説明にあたる部分を問題文〈甲〉から二十字で探し、最初の四字を抜き出しなさい。

問題六 線5 「有陰徳者必有陽報也。」について。

(1) この部分は、「人知れず恩徳を施した（＝陰徳）者は、きっと良い報い（＝陽報）がある」という意味です。これを参考にして、返り点を付けなさい。

(2) 「陰徳」「陽報」とはどのようなことを指していますか。問題文〈甲〉を参考にして、それぞれ解答欄に合う形で書きなさい。

# 〔国語〕

## 解答用紙（高校第一回）

三

問

一

問

七

問

二

問

八

問

三

問

九

問

四

問

六

問

二  
1

2

問

三

問

四

問

五

一

問

一  
あ

たくわ  
え

た  
く  
わ  
え

せん  
ごく

せ  
ん  
ご  
く

き  
ょ  
う  
き

き  
ょ  
う  
き

てい  
せい

て  
い  
せ  
い

か  
く  
り  
つ

か  
く  
り  
つ

得 点

三

問

問

問

一

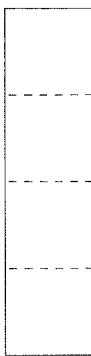
五

五



問

六



問

七



問  
四



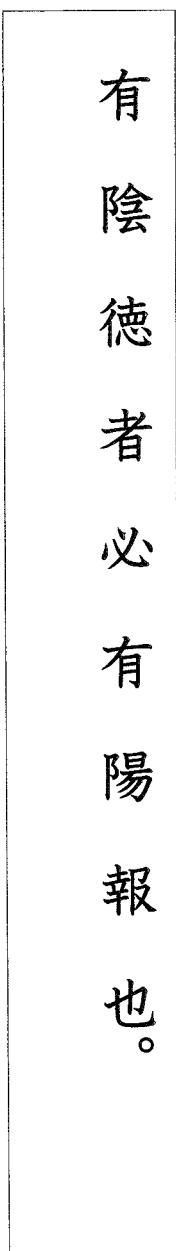
有陰德者必有陽報也。

問六  
(1)

(2)

陰徳・王が

陽報・臣下が



こと。

